

第六回

未来の視点から現在の
社会を構想する時代

鹿児島県の過疎地域面積は県土の七八%で全国六位であり、そこに生活する人口は三七%で全国五位である。この数字は普通の見方をすれば残念な事態であるが、最大の秋田県の約九二%（面積）と約六六%（人口）と比較して少数だと理解することもできるし、さらに前向きに思考すれば、過疎地域が〇・二%でしかない神奈川県と比較すれば開発の余地が十分にあり、過疎人口が〇・二%の東京都と比較すれば空間に余裕のある生活をしていると自慢できるかもしれない。

アメリカの天才コンピュータ学者アラン・ケイの「視点はIQ八〇に相当する」という言葉がある。IQ（知能指数）は一〇〇が年齢相応の知能とする数値であるから、どのような視点から物事を判断するかによって結果の八割は決定しているという意味である。

アメリカで社員を叱咤激励するために創作された商売の極意がある。革靴を製造している会社が新規市場開拓のために二人の社員を発展途上地域に派遣した。しばらくして一人が報告してきたのは商売の対象になる住民は皆無という内容であったが、もう一人は住民すべてが顧客だという反対の内容であった。住民の大半が裸足で生活している状態も見方によつて一八〇度相違した結果になるのである。

一八八二年発行の『第一回日本帝国統計年鑑』によると、鹿児島県の人口は一二七万人で全国六位である一方、東京は九六万人で一六位であった。現在の東京は一一%の人口が集中する地域に変貌している。これは明治維新により政治制度、産業構造などが巨大な変化をしたことが影響しているにしても、一〇〇年という時間単位で社会は急激に変貌するということを象徴している。

明治時代の巨大な転換から一五〇年が経過した現在、社会は方向転換に直面している。産業の中心は工業から情報産業に移行し、自然開発より環境保護が重視され、幕末の開国以上の外国との密接な関係も進行している。このような変化を見通した一〇〇年単位の構想を策定する好機である。

「バックキャスト」という概念が注目されている。「フォアキャスト」は現在を起点に未来を構想することであるが、最初に未来の状態を想定して現在の活動を逆算することで、一例は地球温暖化対策である。従来は目先の目標の達成に集中するだけで、それにより未来に発生する事態を想定していなかった結果、地球温暖化に直面した。そこで今世紀末の気温上昇を二度以下と設定し、そのために現在の活動を規制するバックキャストが登場した。

欧米社会という手本があった明治時代には、バックキャストは容易であったが、手本がない現在、一五〇年先の社会を自身で想定する行動が必要である。このような時期に鹿児島県が再度、バックキャストの手本となることを期待したい。

Profile



東京大学名誉教授

月尾 嘉男 氏

1942年愛知県生まれ
1965年東京大学卒業。名古屋大学教授、東京大学教授、総務省総務審議官などを経て、現在は東京大学名誉教授